

大阪市大『創造都市研究』第5巻第2号（通巻7号） 2009年12月

■ 査読論文 ■

77頁～97頁

市民による文化の創造的享受と芸術系大学 —東京藝術大学と『取手アートプロジェクト』

本田洋一（大阪市立大学大学院・創造都市研究科・博士（後期）課程）

Development of Capabilities : Tokyo University of the Arts and the Toride Art Project
Yoichi HONDA (Doctoral Course, Graduate School for Creative Cities, Osaka City University)

【要旨】

地域の創造的発展のためには、その基盤としての市民、生産と生活の主体である市民における幅広く豊かな享受能力、創造能力の発達が必要である。本論文においては、創造都市論における課題の提起をふまえて、地域の創造的発展を支援する拠点としての芸術系大学の役割を考察する基本的枠組みを考察し、ケース・スタディとして、茨城県取手市における東京藝術大学と「取手アートプロジェクト」の事例を対象として考察を進める。「取手アートプロジェクト」は、市民の幅広い参画のもとに、地域文化資源を活かし、地域活性化の方向を示唆する代表的な取組みと考えられ、そこでの市民、大学、公共の協働の過程、成果と芸術系大学の役割についてその到達点を明らかにし、今後の課題を検討する。

【キーワード】

市民の創造能力、芸術系大学、人間発達、イノベーション・システム、地域活性化

【abstract】

For the development of the region, creative capabilities in the citizens are indispensable. This paper considers the basic direction of the role of university of the arts that is one of the axes of the regional innovation system, and tries to enlarge and deepen the frame of innovation system theory based on the basic aspect of Amartya Sen's capability approach. Based on this view point, the Toride Art Project of Tokyo University of the Arts is considered as a typical regional alliances case, and its theoretical and policy implications and problems are examined.

【Keywords】

Citizens' Creative Capabilities, University of the Arts, Human Development, Innovation System, Regional Development

はじめに

本論文においては、グローバル化と東京一極集中、地域間競争のなかで厳しい環境のもとにあるわが国各地域の持続的、創造的発展の方向を探るため、市民における幅広く豊かな享受能力、創造能力の発達とそれ

を基盤とした地域活性化に向けた芸術系大学の役割に関する理論的、実証的考察を行い、それをふまえた政策的課題の検討を行う。

1990年代以降、各地域で地域発展における芸術文化の果たす役割が注目され、文化拠点の整備、文化事業の展開による創造的人材の集積と地域再生をめざす取組みが展開されてきた。そのなかで、芸術文化の創造性を核とした産業振興、地域発展を強調する創造都市論の理論的展開とあいまって、地域自治体における政策実践においても、横浜市、金沢市等における多様な試みが展開されてきた。

これまでの取組みにおいては、芸術文化事業、美術館等の文化施設の果たす役割に関する考察が主となっているが、本論文においては、わが国各地域における芸術文化を活かした地域活性化の方向の検討にあたって、生産と生活の主体である市民の創造能力という基盤に立ち返り、その発達支援と創造の場の活性化に向けて、中核機関としての芸術系大学が果たしうる役割を考察したい。地域経済、社会の発展に向けた大学の役割については多くの先行研究があるが、そこでは理工系大学と企業との連携が主たる対象とされ、市民を視野に入れた芸術系大学と市民の創造能力支援、地域活性化という視点については十分な検討がなされず、課題として残されていると考えられる。

こうした視点にたつて、ケース・スタディとして、茨城県取手市における東京藝術大学と「取手アートプロジェクト」の事例を対象として考察を進める。東京藝術大学取手学舎の開設を機として、地域、自治体との連携のもとに取り組みされた市民参画型アートイベントである「取手アートプロジェクト」は、市民の幅広い参画のもとに、地域文化資源を活かし、地域活性化の方向を示唆する代表的な取組みと考えられ、そこでその地域資源の活用と市民参画の状況を分析し、市民、大学、公共が連携した協働の過程、成果と芸術系大学の役割についてその到達点を明らかにし、今後の課題を検討したい。

第1節 市民の享受能力、創造能力支援と芸術系大学の役割—考察の基本的視点

(1) 創造性と人間発達支援—地域の創造的発展の基盤

地域の創造的発展のためには、その基盤としての市民、生産と生活の主体である市民における幅広く豊かな享受能力、創造能力の発達が不可欠である。本節においては、創造都市論における課題の提起をふまえて、芸術文化機関、団体における文化普及、市民の文化活動支援の取組に関する先行研究を検討し、地域の創造的発展を支援する拠点としての芸術系大学の役割を考察する基本的枠組みを考察する。

その際、考察の基本的視座として、佐々木雅幸教授によって提起された「創造都市論」における論点提起をより深めて、以下の二点を考察の基本的視座としよう。

その第一は、所得の域内循環を基盤として、文化施設等の文化資源、人材の蓄積による消費需要の洗練、高度化、生産能力と享受能力の相互媒介な発展の条件を強調する「文化的生産の金沢モデル」⁽¹⁾の視点をふまえた各主体における生産、消費能力の発達支援システムのあり方、とくに交流、相互学習、創造の場のあり方の考察の課題である。

芸術文化、科学研究、技術開発等における諸個人の創造的活動を今日の知識経済における経済発展の鍵として位置づけるとき、その不可欠の基盤となるのが市民における高い享受能力と創造能力であり、生産者(企業者、勤労者)における高度な学習能力を基礎とした高い生産力が質の高い製品、サービスの供給を可能にし、他方で、消費者である市民の高い享受能力が質の高い需要創造につながり、生産と消費がより高いレベルで循環する地域経済の「好循環」をどのようにして生み出していくかが問われている。

第二は、創造活動、イノベーション活動が具体的に展開され、発展していく地域における「創造の場」の構造分析の重要性である。佐々木教授によりJ.ジェイコブスの都市論をふまえ強調された科学技術、芸術文化における創造性の発展の場、「インプロビゼーション」が展開される創造の場の成立条件はどのようなものか、とくに本論文の視点からは、芸術系大学をはじめとする諸支援機関が、関連機関との連携ネットワークのもとに、相互学習、交流を促進し、諸個人の発達を支援していく多様な場、機会を生み出していくあり方の考

察が求められている。

この基本的視点をふまえ、以下、市民の幅広い潜在能力発達支援に向けた芸術系大学と地域自治体の連携を中軸とする支援ネットワークのあり方という論点を中心に、先行研究をフォローし、分析の課題、考察の基本的枠組みについて検討しよう。

(2) 芸術系大学、地域自治体の連携を中軸とする支援ネットワーク

市民における芸術文化の享受、鑑賞能力支援における芸術文化機関の果たす役割について、従来、アートマネジメント論、芸術文化施設のアウトリーチ活動の考察において検討が深められてきた。

美術分野の鑑賞者における芸術作品の享受に関する考察においては、作品を媒介とした新たな視点の獲得と相互対話という視点が強調されている。ニューヨーク近代美術館 (MOMA) において長く教育事業に携わったアメリカ・アレナスの鑑賞教育活動をふまえて、上野 [2001] は「対話による美術鑑賞」の重要性を強調し、市民の自らの創造的な作品理解と他者とのコミュニケーションを通じた意味の確認、情報発信を重視し、子どもや市民による作品を媒介とした相互の対話のなかで「作品をみるまなざし」が統合され、参加者が共有する新たな「知の創出」と、参加者の充実感と達成感、新たな「生きる力」の育成が可能となるとする視点を強調している⁽²⁾。

また、音楽、舞台芸術の分野においては、吉本 [2000] は、アメリカにおけるニューヨークのマンハッタン・シアター・クラブ等のNPO劇場の取り組み事例をふまえて、その教育普及プログラムが作品の鑑賞を通じて市民や子どもが自分自身で考え、発言することに重点が置かれていることを指摘し、衛・本杉編 [2000] も公共ホールにおける地域との回路創造の重要性を強調している。

こうした考察は、総じて、芸術文化団体、文化施設の活動展開における地域との連携、市民における芸術作品の享受と相互交流の場、機会の創造とそれを通じた市民の新しい活力の創出と地域コミュニティの活性化という視点の重要性を強調するものとして位置づけることができる (川勝・根木 [2002]、上山・稲葉 [2003] 参照)。

他方で、1990年代以降、各国、各地域における経済政策、学術政策において地域の競争力、イノベーション力の基盤としての大学の果たす役割が強調され、そこでは、地域内での知識、ノウハウ (Localized Capabilities) の蓄積と共有が重視されてきた。地域における共通の社会的、文化的基盤を背景とした相互学習、知識の共有を土台として、多様なイノベーション活動、起業活動を促進、活性化していく地域の諸制度、諸機関のシステム、社会的、文化的風土の考察に焦点がおかれている⁽³⁾。

典型地域の例として、シリコン・ヴァレーを対象としたLeeほか [2000] の考察においては、当該地域において、科学的、技術的優位から生産活動、企業、市場創出へのすみやかな発展を可能にする地域の特有の「企業活動環境 (habitat)」が競争優位の根源にあることを強調し、その構成要素として、研究大学と人材の交流、金融、法律、会計、人材確保等の専門的支援サービス、企業成長を支援する政策等を挙げている⁽⁴⁾。

こうした先行研究の蓄積をふまえるとき、芸術系大学の地域連携の考察において芸術文化の領域における情報、知識共有、連携の場の特性の考察が重要な課題となる。とくに芸術系大学を核として集積された創造的人材と公共、市民の協働の連携のあり方、その成果、支援ネットワークの特色という点が考察の柱となると考えられる。東京藝術大学取手学舎の開設を機に、地域自治体との連携のもとに取り組みされた「取手アートプロジェクト」は、市民、大学、公共団体の協働による取り組み、地域資源の文化的活用による地域活性化への模索という2点において、芸術文化を活かした地域イノベーションの方向を示唆する代表的な取り組みと考えられる。以下、ケース・スタディとして、東京藝術大学と「取手アートプロジェクト」の取り組みについて考察を進めよう⁽⁵⁾。

第2節 取手市における芸術文化を活かした地域活性化への取り組み

(1) 近郊住宅都市取手の政策課題と東京藝術大学との連携

茨城県取手市は、東京都心から40キロ圏、茨城県の南端、利根川に面し、高度成長期に新住民が急増し、近郊農村と日本住宅公団による大規模団地をはじめとする新たに開発された住宅地が混在する首都圏近郊都市である。取手市の人口は、住宅開発により1965年の約4万人から、ピークの1995年には約11万7000人へと約3倍に急増したが、その後横ばいからやや減少傾向を示し、高齢化が進展している(図1参照)。また現在の市人口約11万人のうち約半数が他地域から移住してきた新住民となっている。

人口構成で最も多数を占めるのが、55歳～59歳層、高度成長期に取手市に移住してきた団塊の世代である。近年そのリタイアが進みつつなかで、定住と地域文化への関心が高まりを見せてきており、取手市が各年実施している市民意識調査においても、市政に対する意見として「公共交通機関の充実」、「緑地・公園の充実」などの住民ニーズが高く、安心して住みやすい魅力あるまちづくりへのニーズが強い⁽⁶⁾。後に見るように「取手アートプロジェクト」における市民ボランティアとして市民参画の中心となっているのがこの世代である。取手市における市政運営の方針においても、成長経済の終焉のもとで、定住魅力の向上と人口減少社会のもとでの交流人口増大に向けた都市基盤整備を重要な課題として位置づけている。その推進にあたって、1991年市の誘致活動により市東部小文間地区(図2参照)に立地した東京藝術大学取手学舎の有する芸術文化の人材、知識を活用したまちづくりが重要な課題として認識された。

取手学舎においては当初、美術学部1回生のみが在籍していたが、1999年には先端芸術表現科が創設され、2002年には、音楽学部音楽環境創造科が創設された(同学科は2007年より足立学舎に移転)。1991年の開設以降、藝大においては、取手市と連携した芸術文化事業として、地元学校への講師派遣、駅前街路への作品設置、壁画の設置、芸術大学卒業生の作品買い上げと街路への展示等の事業が実施されてきたが、1999年の先端芸術表現科が創設、博士課程までを含む教育、研究活動の体制整備を受けて、「取手アートプロジェクト」が発案され、開始された。

市における芸術文化を活かしたまちづくりへの模索と藝大における地域連携への意欲、市民における「第9」を歌う会など市民参加の文化活動の蓄積の3つの基盤のうえにプロジェクトは開始された。開始当初より、藝大におけるプロジェクト推進の中心的な役割を果たしてきた美術学部渡辺好明教授は、取手アートプロジェクトの発足の藝大としての原点に、ドイツへの1985年からの4年間の留学と作家活動の経験を通じた都市と芸術文化の密接な連携への経験をあげる。教授が留学したデュッセルドルフ市においては、市の芸術支援システムのもとで、アトリエ、美術館などの整備により作家が地域社会のなかで活動し、その成果を地域に還元していく環境整備がなされていた。また市の規模もコンパクトであり、市民とアーティストとの相

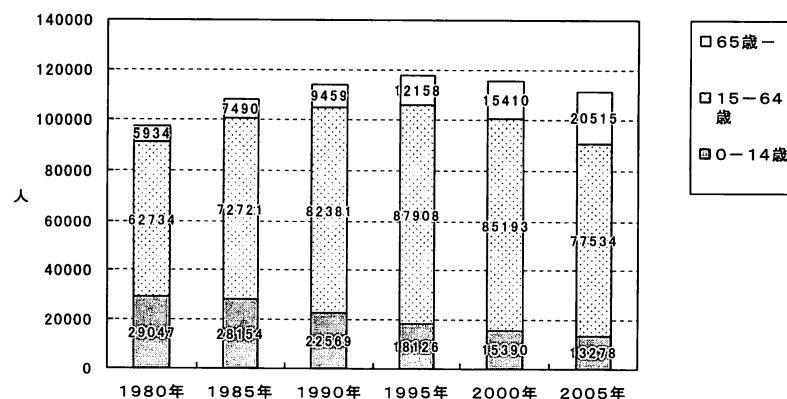


図1 取手市人口推移

(注) 1980年～2000年は取手市、藤代町の合算人口
(出所) 国勢調査

互の交流も容易であるのに対して、日本においては、アーティストと市民との日常的な交流はほとんどなく、藝大学舎も市域の東端に立地し（図2参照）、より幅広い市各地域への展開と市民との交流のためには、大学としての地域展開への積極的取り組みとそのための環境整備が重要であるという認識があった⁽⁷⁾。

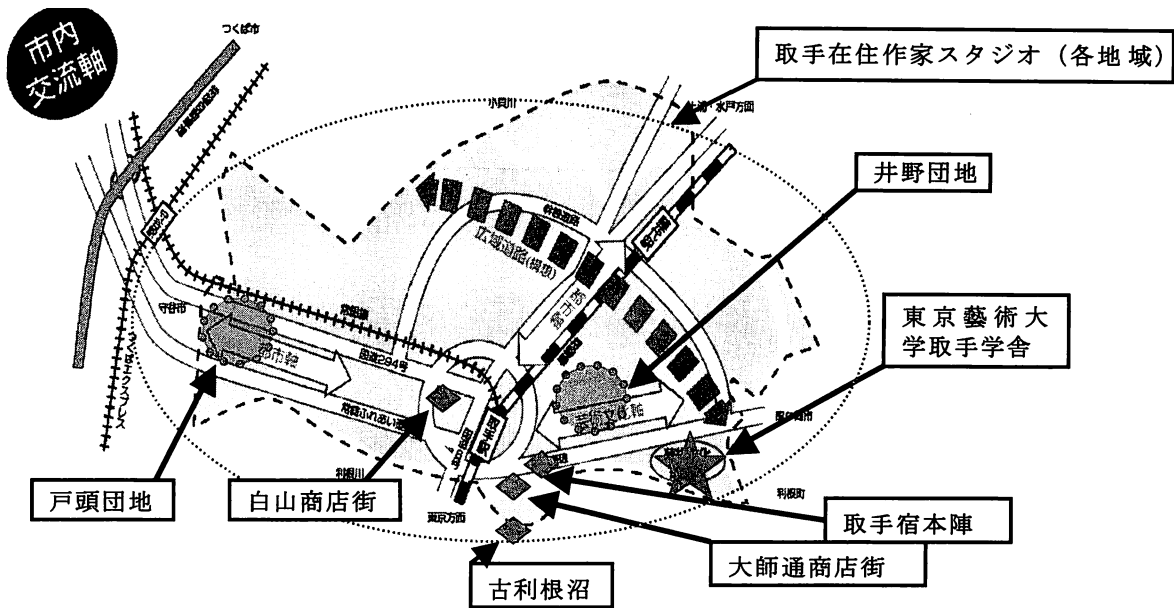


図2 取手市の交通体系と「取手アートプロジェクト」の主な展開拠点
 (出所)『第五次取手市総合計画』(平成19年4月)をもとに作成

(2)「取手アートプロジェクト」の特色：(1) 大学、市民、公共団体の協働によるプロジェクト実施体制

1999年からスターとしたプロジェクトの主要事業は、毎回テーマを設定し作品を公募し若手アーティストの登竜門をめざす公募展（隔年開催）と取手市在住美術作家の活動を紹介するオープンスタジオ（隔年開催）であり、これに加えて、壁画プロジェクト、こどもプログラムなど取手市における芸術環境整備の事業が展開されてきた。プロジェクトの10年間の取組みは、地域における市民の文化環境の創造に寄与するとともに、より広域的にもアートの分野の特色ある取り組みとしての評価を高め、交流人口の増大に貢献してきた。アートプロジェクトへの参加者、観客は、2004年の4000人から、2005年には8000人、2006年の戸頭地区のイベントでは1万4000人と増加しており、人口11万人の都市として大きな集客効果をあげるとともに、首都圏における特徴あるアートイベントとしての評価も確立されてきた⁽⁸⁾。

わが国の各地域において、芸術文化活動による多様な地域活性化の取り組みが進められているなかで、取手アートプロジェクトは、市民と大学、公共団体の協働による芸術文化プロジェクトとして、地域の多様な資源を文化の視点から活用し、市民が芸術文化を通じたまちづくりの主体として活躍している点で大きな特色を有している。

本プロジェクトの第一の特徴は大学と市民、行政による協働プロジェクトであるという点にある。事業企画、運営は、大学、市民ボランティア、行政等による協働の事業実施体制により進められている。以下、取手アートプロジェクト実施における大学、市民、公共団体の協働の取り組み体制の特色について考察しよう（図3参照）。

プロジェクトの意志決定機関である実行委員会は東京藝術大学学長を委員長として、取手市長、取手市各団体代表で構成される。そのもとでプロジェクト実施の事実上の中核となる実施本部は、市民ボランティア、東京藝術大学美術、音楽両学部の教員、学生等により構成される。この実施本部の活動を支えるのが支援企業、TAPエンジェル等の多様なプロジェクト支援者である。

市民ボランティアには、数十名の比較的中高年齢の男性、女性が参加している。メンバーの市民には、合

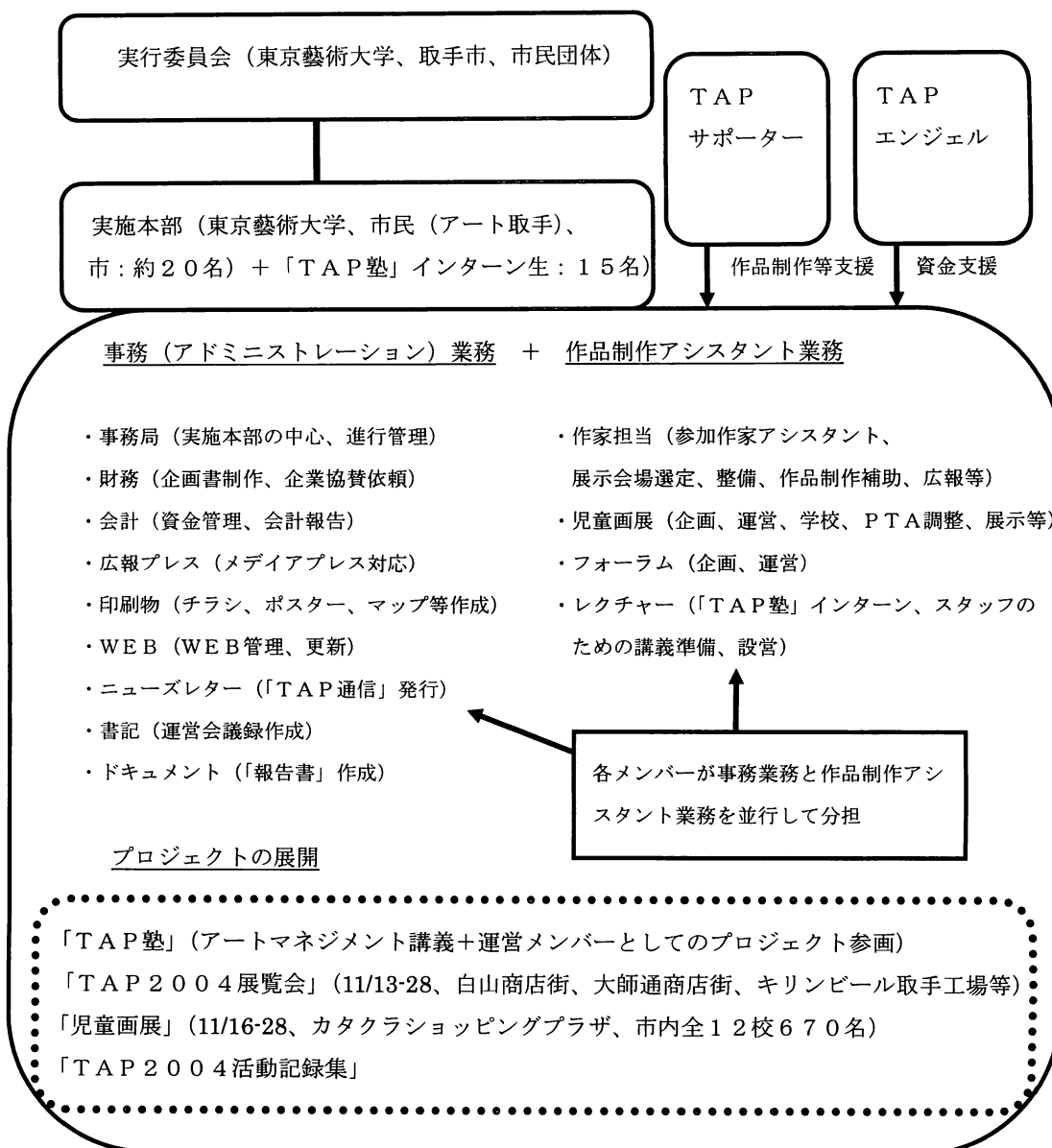


図3 「取手アートプロジェクト」における大学・市民・公共団体協働の体制

(注) 「プロジェクト」メンバー数、年間事業展開については2004年プロジェクトをモデルとして例示。

(出所) 取手アートプロジェクト実行委員会 [2005]、[2006] にもとづき筆者作成

唱、地域歴史文化活動への取り組みなど各分野の文化活動の経験者も多い。約2週間の展覧会本番の開催を中心として、参加メンバーは、事業企画、資金確保、企画展作家公募、審査、広報媒体の制作、会場地元調整、イベント設営、進行、報告書、カタログの作成など、一年間を通してほぼ常時、事務局の中心の一翼を担い活動を展開している。さらにプロジェクト開催期間中の各会場においては、案内、作品解説等に意欲的に取り組み、担当者が担当する各作品について十分な事前準備のもとに熱心に解説を行うなど、プロジェクトの主役の一員である。また取手ライオンズクラブなど地元企業や市民が経済面からプロジェクトを支援する「TAPエンジェル」制度も実施されている。

さらに、2004年から2006年の3年間には熊倉純子塾長による「TAP塾」が開催され、そのメンバーがプロジェクトの運営に参画した。「TAP塾」は、次世代のアートマネージャーの育成、芸術によるまちづくりをめざす人々に情報と実践知を提供する場として実施され、公募された各年15名から30名、年齢も10代から60代に及ぶ幅広い総計52名の塾生(インターン)は、4月から1年間、プロジェクト実施本部のメンバーとして、

企画、広報、資金調達、事業実施等に携わり、同時に、アートマネジメントに関する知識を水戸芸術館学芸員等各分野の講師から学び、その修了者から、現在のプロジェクトの事務局を担う人材が育っている。

こうした大学・市民の協働によるプロジェクト実施体制の構築は大きな成果を挙げてきたが、同時にいくつかの課題も生じている。

その第一はプロジェクトの規模の拡大にともなう事務局メンバーの事務的負担の増大である。(図3)に見られるように、事務局メンバーは、予算、広報等のアドミニストレーション業務と作家の作品制作支援業務を兼ねて担当しているが、とくに事業規模の拡大は必要資金の増大と管理負担の増加につながり事務スタッフにおける課題となっている。年度当初の段階では公的助成が実施されないため事業資金の借り入れ負担が生じている。今後、事業の安定的な推進を図るためには、文化事業団体における資金管理等事務処理を支援するシステムの検討が求められている。

第二の課題は、事務局体制の次世代への継承の問題である。プロジェクト発足10年を経て、発足当初からプロジェクトを担った世代から次世代への継承が課題となりつつある。発足以来4か所を移動してきたプロジェクト事務局は井野団地における「TAPPINO」の開設により定着の見通しを得たが、取手で育ったスタッフが他地域でのアートプロジェクトにおいても活躍の場を広げつつあり、次代に向けた体制確立が求められている。

(3)「取手アートプロジェクト」の特色：(2) 地域資源の文化的活用、アートを活かしたまちづくりの探求

本プロジェクトの第二の特徴は、取手市という地域全体を対象として、各地域の多様な地域資源の文化的活用を探求するプロジェクトであるという点である。プロジェクトの開催会場設定においても、美術施設等単独の文化施設における事業ではなく、市民の幅広いプロジェクトへの参画という基本理念をふまえて、各年、取手市内の自然的、歴史的資源に着目し、そのアートの拠点としての活用を図っていく地域展開が試みられている。その主な取組みを見よう(図2、表1参照)。

表1 取手アートプロジェクトにおける地域資源の文化的活用の取組み

年次	市域自然資源・歴史資源	活用の形態
1999年	取手駅東口駅前 市内在住作家宅、アトリエ	・拠点での作品制作、展示(「リサイクリングアート」ほか)
2000年	市内空き家	・拠点での作品制作、展示
2001年	市内在住作家宅、アトリエ	・拠点での作品制作、展示
2002年	利根川(河川敷、古利根沼)	・拠点での作品制作、展示、・「舟橋」
2003年	商店街、鉄道高架下、作家宅・アトリエ	・拠点での作品制作、展示、・「壁画」
2004年	商店街、ビール工場、ボウリング場	・拠点での作品制作、展示
2005年	東日本ガスガスタンク 市内在住作家宅・アトリエ	・「ガスタンクデザイン」 ・拠点での作品制作、展示
2006年	戸頭団地旧終末処理場、旧本陣、公園、 市福祉会館	・拠点での作品制作、展示
2007年	市内在住作家宅・アトリエ、公園	・拠点での作品制作、展示
2008年	井野団地(居室、壁面、緑地、遊園等) 井野団地ショッピングセンター旧店舗	・拠点での作品制作、展示、 ・「井野アーティストヴィレッジ」開設
2009年	市内在住作家宅・アトリエ 井野団地旧集会施設	・拠点での作品制作、展示 ・「TAPPINO」開設

(出所)「取手アートプロジェクト」各年記録集より筆者作成

2002年のプロジェクトは、「Take Me to the River 川を知る川に学ぶ」をテーマとして実施された。取手市は利根川北岸に東西に沿い、利根川水運の拠点⁽⁹⁾、水戸街道の本陣として繁栄した歴史を持つ。面積においても利根川河川敷が約900haと市域の約4分の1に及ぶ、川、水と深いつながりを有する都市である。こうした自然的、歴史的視点にたつて、プロジェクトにおいては、公募作品が利根川周辺で展示された。

また、この年のユニークな試みとして地域市民の主導のもとに、利根川に面する水運の歴史に遡った「舟プロジェクト」が実施された。ここでは、市内旧家に保存されたかつての水運の担い手である「サツパ舟」を活用し、旧川道である「古利根沼」を舞台に取手市と対岸の我孫子市を繋ぐ「舟橋」が制作されるとともに、地域の水運の歴史を子どもに語り継ぐワークショップも開催された。

2003年のプロジェクトでは、地域在住作家15名の作品を紹介する「オープンスタジオアトリエ公開」と白山商店街の空き店舗を活用した「商店街スタジオ」の取組とともに、とくに、常磐線高架下の環境改善を図る取手市からの要請に応じて、「壁画プロジェクト」が実施された。藝大大学院美術研究科壁画研究室の協力により大学院生住康平氏が原画を作成し、市民の協力のもとに2ヶ月をかけて高さ5m、幅40mに及ぶ壁画の制作が行われた⁽¹⁰⁾。

さらに、2004年のプロジェクトでは、白山商店街、大師通り商店街など市内の商店街、ボウリング場などとともに、新たに市内北部に所在するキリンビール取手工場が展示会場となり事業が展開された。

こうした地域資源の文化的活用は、取り組みのなかでそれぞれの担当者に大きな達成感と連帯の自覚をもたらすとともに、とくに作品が恒久化された「壁画」などは地域住民においてプロジェクトの大きな成果として受け止められている⁽¹¹⁾。

この地域の資源を文化の視点から市民との協働により活用していくという特色が典型的に発揮されたのが市西部の戸頭地区を中心に展開された「取手アートプロジェクト2006」であった。そこでは、供用が廃止された取手市下水道組合施設である下水処理場(戸頭終末処理場)が主会場の一つとして活用され、地域住民の参画によって文化の創造的享受と地域づくりへの機運が高まった。次に節を改めて詳しく見よう。

第3節 「取手アートプロジェクト2006」における地域資源の活用と市民参画

(1) 取手市戸頭地区における「取手アートプロジェクト2006」の開催

2006年のプロジェクトは11月11日から26日まで土日祝日の9日間開催された。プロジェクトは(図4)に見られるように、取手市西部戸頭地区に所在する用途廃止された「旧戸頭終末処理場」をはじめ、市立福祉

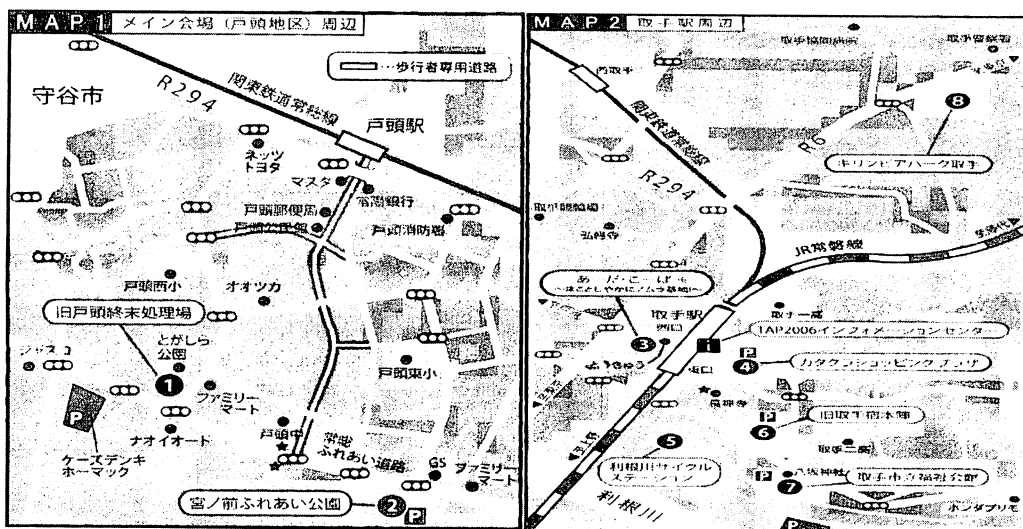


図4 「取手アートプロジェクト2006」における会場配置

(出所)「取手アートプロジェクト2006」プログラム

会館、旧取手宿本陣、宮の前ふれあい公園等、市内の10会場において美術分野、音楽分野の幅広い文化事業が展開された⁽¹²⁾。野村誠氏による市立福祉会館などを中心とした音のプロジェクト、藤本由紀夫氏による宮の前ふれあい公園におけるサウンドスケープの試み、旧本陣の建物空間を活かした音とアートの試みなど興味深い催しが多数展開されたが、ここでは、戸頭地区における地域住民との取り組みに的を絞り考察しよう。

戸頭地区は、市西部に位置し、1980年に入居が開始された日本住宅公団（現都市機構）戸頭団地と一戸建て住宅が複合する地域であり、人口は約12000人で市全体の約1割を占める。地区住民の多くは東京等への通勤者である⁽¹³⁾。取手市は東西が約15kmあり、国道6号、常磐線で東西が分かれ、バス路線も東西が相互につながらず、東京都心への通勤経路も取手市経由と守谷市経由がほぼ半分づつを占め、市各地域の相互のつながりが薄い状況にある（図2参照）。

そのなかで、一戸建て住宅の町会役員、住宅公団（現都市機構）団地自治会役員は多く昭和50年代から30年以上の居住者であり、戸頭地区の道路、緑、下水道など地域の居住環境への評価は比較的高く、団地自治会と一戸建ての町会の共同の夏まつりが開催され、また団地での音楽、児童劇、映画鑑賞などの取り組みが十数年行われるなど、地域としてのまとまり、文化的な取り組み意識は比較的強かった⁽¹⁴⁾。

東京等への通勤者が多く、地域では日常高齢者、こどもの姿がめだっている。地域としてプロジェクトの開催が若い世代が集まる機会になり、そのエネルギーが地域活性化の機会になればという期待があり、さらに、地区内の用途廃止された下水処理施設である「旧戸頭終末処理場」を会場として活用したいとのアートプロジェクト事務局からの働きかけに対して、用途廃止後その有効活用が地域としても課題とされてきたことが地元としてもプロジェクトへの関心が高まる要因となった。他方、アートプロジェクトにおけるプロジェクト会場としての「旧終末処理場」の選択には、この年のゲスト・プロデューサーの一人であり、自らの制作活動の原点に「70年大阪万博」のイベント終了後の「廃墟」からの創造をあげるヤノベケンジ氏の判断が強く働いた⁽¹⁵⁾。

(2)「旧戸頭終末処理場」の文化的活用と市民の主体的参画

会場とされた「旧戸頭終末処理場」（図5参照）は開催が決定された時点では用途廃止されたままの雑草等がおいしげる環境であった。地域においても中へ入ったことがない市民がほとんどであった。敷地や施設の

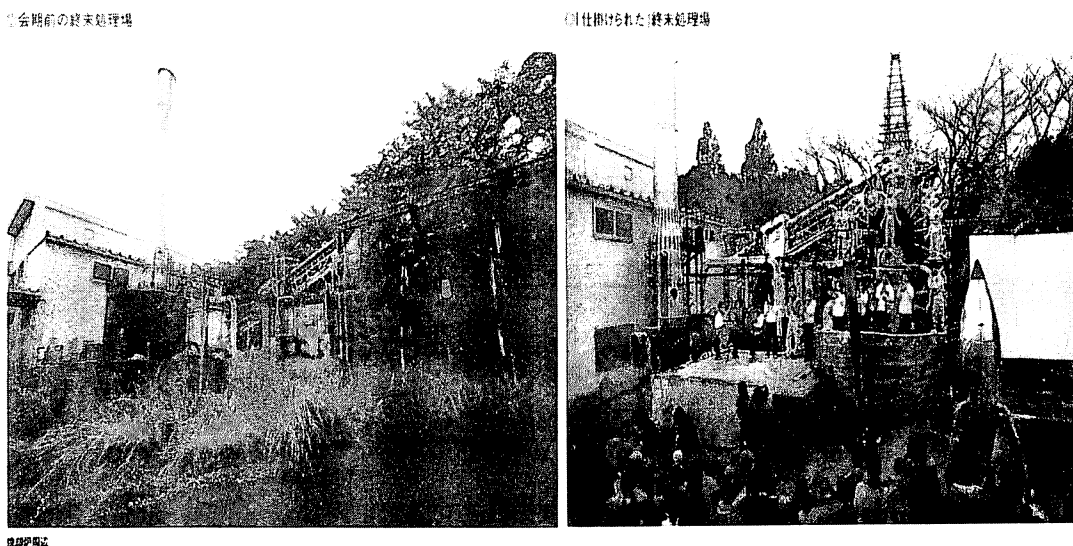


図5 「旧終末処理場」会場光景
 (出所) 取手アートプロジェクト実行委員会 [2007]

草刈り、清掃、会場設営、作品設営には作家と地域住民、地元業者がともに参画した取り組みとなった。

〔(2006年)10月15日の終末処理場大掃除には、戸頭の町会と自治会からの参加も含め70人に及ぶ人びとが集い・・・関西方面からの作家が半分以上を占めるヤノベ組には・・・町会メンバーが所有する大きな一軒家が提供され、通称『ヤノベハウス』と呼ばれるレジデンスとなった〕⁽¹⁶⁾。

展示会場としてのプロデュースはヤノベケンジ氏により行われ、施設の内外の空間を活用して氏及び21名(組)の作品が展示された。ヤノベ作品である処理場焼却炉煙突を活用した作品「Flora」、淀川テクニックによる終末処理場廃棄物を活用した作品「大王鬼神(ダイオキシン)」、最終沈殿池に利根川の水を循環させて設置された栗山斉の作品「re-mix」、水槽内面の汚れを活かした浅井祐介「fu-ka drowing」など、各作品は、屋外、屋内をとわず作品が設置される環境に着目し、そのエネルギーを活用した興味深い作品が多く展示された。

自治会、町会の役員を中心として地域住民がプロジェクトに参画するなかで、まず、大きな魅力となったのは若い作家の作品創作へのエネルギーであったという。作家の想いと熱意への共感から、関西から来訪の作家への宿舎の提供をはじめ、作品制作への支援、手伝いもおのずから生まれてきた。作家の作品創造への意識が住民に伝わり、地域に何ができるかという期待と交流が生まれてくる。アートといわれてもよくわからないが、なにをやるのかという魅力が感じられ、作品制作への支援、交流のなかで、住民の有するノウハウ、知恵と能力も発揮されていった。

さらに、アートの創造の過程、準備段階から作家とともに携わることで、住民の側にも自らのプロジェクトであるという自覚が生まれ、作品への愛着と、コンセプトへの理解が進んでいった。

エアレーションタンクの壁面を活用した浅井作品の制作に協力した役員は、当初ただのゴミ、汚れと思っただけ部分が最終的には一つの作品の中に活かされていくことが驚きであったという。こうした作品制作への取組における作者と作品への共感が展示会場での住民による観客への案内、熱心な作品解説に結びついていった。作家の制作過程にかかわるなかで掴みとられた住民自らのことばによる作品の説明が行われ、観客に作品をアピールしたいという思いが多く、観客に伝わったのである。

公開日の土日だけではなく、平日においても作品、会場の補強作業などへの住民の取り組みがなされた。取手アートプロジェクトにおいてもここまで地元住民が主体的に参画したのは初めてのケースであったという。

(3) 地域住民における「アートプロジェクト」、藝大の地域連携活動に対する評価

自治会、町会役員を中心とした地域住民参画のもとで実施されたアートプロジェクトの展開と藝大の地域連携への取組について、戸頭地域における住民の評価、課題認識はどうか。

この点について、戸頭地域総戸数の約半数を占める都市機構戸頭団地自治会会員を対象として実施したアンケート調査の結果から考察したい。本調査は、都市機構戸頭団地自治会に所属する住民に対して2009年11月実施したものであり、配布数1647、回収数194(うち有効回答192、無記入2)、有効回答率11.7%であった。

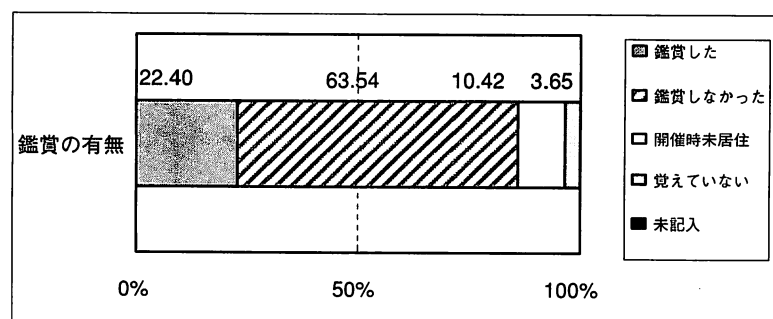


図6 「取手アートプロジェクト2006」鑑賞の有無

(出所) 筆者作成

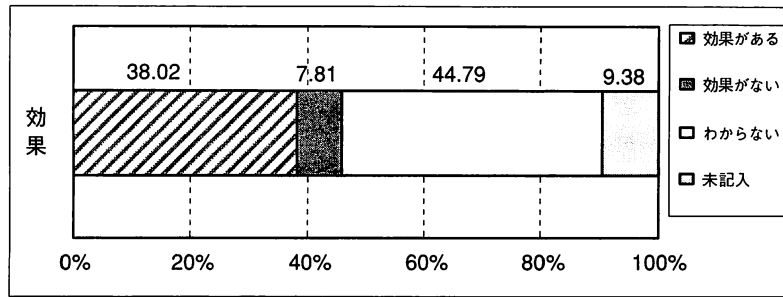


図7 「取手アートプロジェクト 2006」の地域振興効果の評価
(出所) 筆者作成

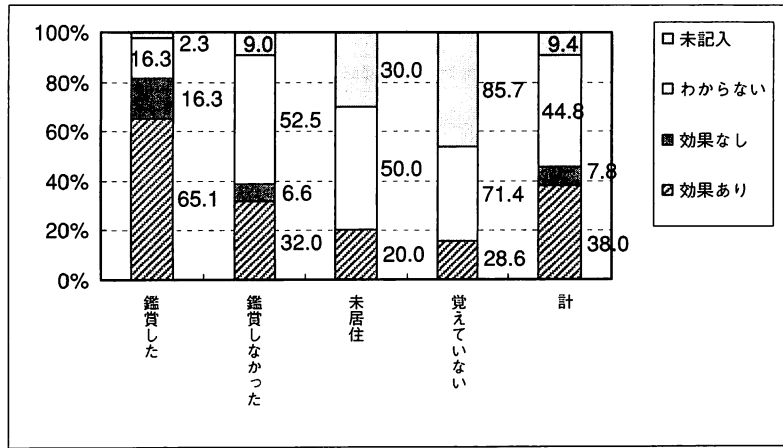


図8 鑑賞の有無と効果評価のクロス集計
(出所) 筆者作成

まず、「アートプロジェクト」の鑑賞の有無については、(図6)に見られるように、「鑑賞した」住民は22.40%、「鑑賞しなかった」が63.54%であるが、「開催当時未居住」を勘案すれば約3割の地域住民が鑑賞したことが推計される。

次に、アートプロジェクトによる地域振興への効果については、(図7)に見られるように、「効果がある」とする肯定的評価が38.02%と「効果がない」7.81%を大きく上回っている。

この効果の評価について、鑑賞の有無とのクロス集計を見たのが(図8)である。見られるように、鑑賞した住民においては、効果への肯定的評価が65.1%を占めるのに対して、鑑賞しなかった住民は32.0%にとどまり倍以上の高率となっている。

次に、地域振興効果の内容について複数の選択肢から回答を求めた結果が(図9)であり、各項目について、「現在すでに効果があらわれている」と「今後効果が見込まれる」という二つの段階に即して評価を求めている。ここでは、「すでに効果あり」とする項目では、「住民の芸術への関心が高まる」が最も多く、次いで「地域コミュニティのつながりがより強くなる」の評価が高い⁽¹⁷⁾。

今後の効果についても、「住民の芸術への関心が高まる」が最も多いが、それとならんで「地域のあり方を住民が考えるきっかけとなる」、「地域と芸術家の交流が深まる」、「取手市や地域の新しい誇りとなる」、「内外からの来訪者の増加」という項目についても評価が高く、アートプロジェクトの地域活性化への幅広い潜在的な効果について住民の評価は高い。

また、「旧終末処理場」の今後の活用方向については、(図10)に見られるように、「アートプロジェクトが開催できるような文化の拠点としての活用」という回答が37.50%を占め最も多いが、「文化以外の分野で地域のニーズに応える場所」という回答も20.83%にのぼり、地域のニーズの幅広さを示している。具体のニ

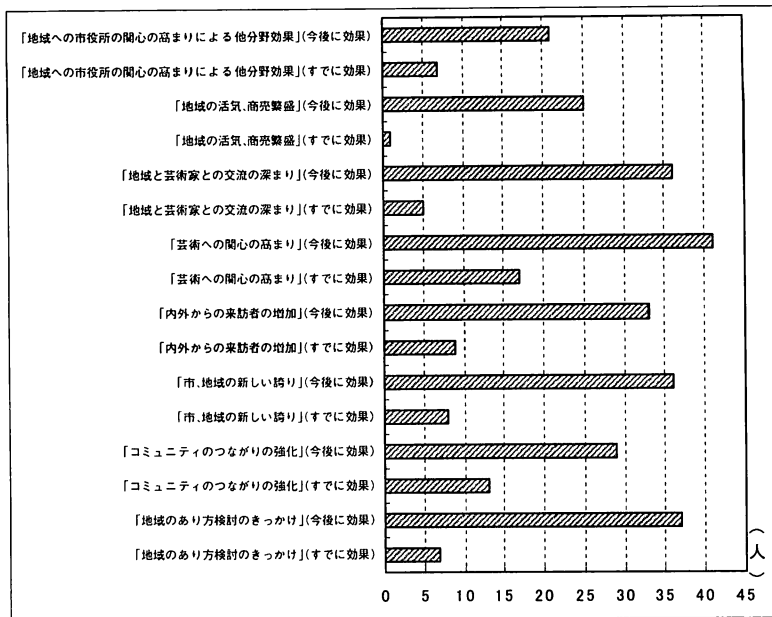


図9 「取手アートプロジェクト 2006」の地域振興効果の分類
(出所) 筆者作成

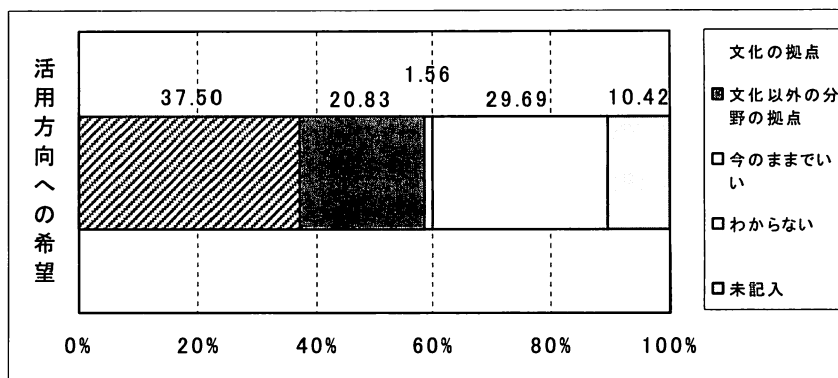


図10 「旧終末処理場」の今後の活用方策
(出所) 筆者作成

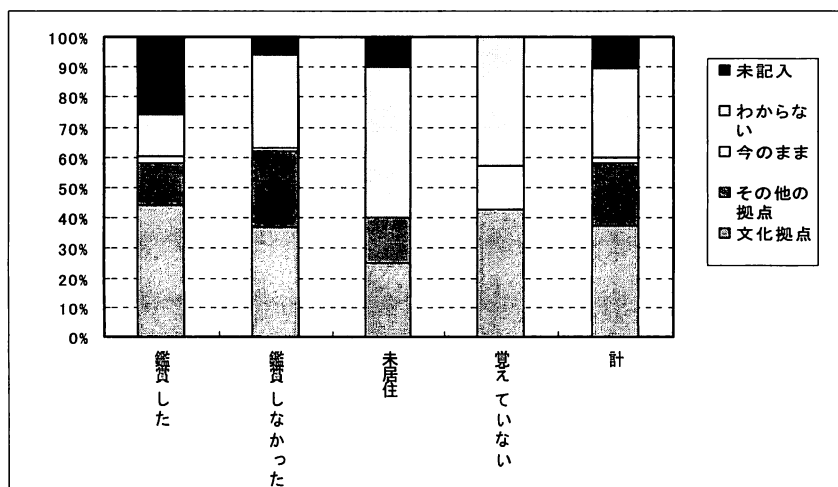


図11 鑑賞の有無と「旧終末処理場」の今後の活用方策のクロス集計
(出所) 筆者作成

ーズとして例示された項目としては、「コミュニティセンター」、「公園、花壇」、「児童館」、「駐車場」、「老人いこいの家」、「フリーマーケット」、「更地売却による財政収入」など多岐にわたっているが、地域ニーズに応えた活用への希望は強い。

さらに、この活用方向についてのニーズを鑑賞の有無とクロス集計で見たのが（図11）である。先のプロジェクトの評価と同様に、鑑賞した体験は文化施設へのニーズを高める方向に働いているが、同時に、先のプロジェクトへの評価とはやや異なり、鑑賞しなかった、あるいは覚えていないという住民においてもほぼ同程度の文化施設へのニーズがあることは注目すべきと考えられる。

最後に、東京藝術大学における地域連携事業について、自由記載により意見を求めた。回答は72件がよせられ、その内容を分類すると、藝大による市民参加の多様な場の創造、事業の継続性への希望、藝大事業への情報アクセスの課題、取手市の地域振興策への貢献などの項目が多くを占めている。

第一に、藝大による文化事業の積極的実施、市民参加の場の創造については33件と最も多くの希望がよせられており、

「こども、大人を含めた地域の人たちが一緒にできる作品づくり」、
 「若い学生による発信、芸大主催の公開講座」、
 「公民館での市民への指導」、
 「病院、駅などでのアートプロジェクト」、
 「ジャズ、ニューミュージックなんでも青空コンサート」、
 「ガード下のすばらしい絵はいろいろな壁に描いてほしい」、
 「アート教室、コンサートや外国人との交流」、
 「小規模な音楽会等を多く開催」など、こどもから高齢者まで、幅広い市民が参加できる多様な芸術鑑賞の場の開設、藝大学生と市民の協働による作品づくりなどの要望が多い。

第二に、実施される文化事業についてその継続性への希望が強い。
 「TAP2006は良かったが1回きりでは効果は少ない」、
 「アートプロジェクトを毎年開催してほしい」、
 「住民と学生の交流が大切。それぞれの立場を尊重し機会を重ね交流することが大切」など、事業の価値を評価しつつ、課題として継続を求める意見が強く出されている。

第三に、藝大が（図2）に見られるように取手市域の東端に位置することをふまえて、市民の藝大、文化事業へのアクセスをより容易にすることへの要望が強い。

「イベント、美術展、音楽会等広報がたりない」、
 「藝大の出入り口などもう少し入りやすいようにしてほしい」、
 「プロジェクトの開催を知らなかった」、
 「藝大がどのようなことをしているか分からないので学園祭など見に行きたい」、
 「藝大は市の東の端にあり西の人たちへの宣伝が少ない」など、藝大における地域へのより積極的な広報と地域への関わりを求める声強いことは注目すべきと考えられる。

第四に、藝大がその有する知識、人材を活かして取手市における今後の地域活性化の方向づけに関して一層の貢献を求める意見も出されている。

「取手の歴史をふまえてアピールする材料を大学の叡智で開発してほしい」、
 「市民の負担をかけずに文化施設を充実」、
 「取手駅地区の開発方向についての貢献」など藝大の組織的知を活かした地域支援を求める声がある。

これらの分析をふまえるとき、戸頭地区におけるアートプロジェクトの展開は、地域住民の芸術文化への関心の高まり、地域内のコミュニケーションの活性化を通じて、地域住民が主体的に参画する地域創造に、大きな貢献をなしたと判断しうる。

自治会、町会役員を核としてプロジェクトに参画した住民においては、プロジェクト終了後も、旧施設の文化的有効活用も含め文化を活かした地域づくりへの意欲の高まりが見られる。地域としてのその具体的な方向づけについては、役員の間でも、またアンケート結果に見られるように住民間でも多様な意見が存在するが、そうした地域住民の意見、判断の多様性も含めて、アートプロジェクトの実施とそれへの参画が幅広い討議の機運、地域における社会的ネットワークの強化を生み、地域の魅力増進、居住環境の改善、地域独自の「何か」を創造したいという希望の継続に貢献しているといえるのである。

藝大の地域連携活動については、その積極的な展開を希望する意見が強く出され、地域住民の大学の有する芸術文化資源を活用した地域連携活動へのニーズの高さを示している。

同時に、大学と地域との連携活動における、いくつかの重要な課題をも示していると考えられる。第一に、藝大の取手市における立地とも関連して、とくに西部地域の住民においては、藝大とその実施する芸術文化事業へのアクセスが現状では十分でないという認識が存在することである。第二に、1回限りのプロジェクトではなく、大学と地域との継続的な関わりを求める声があることにも留意が必要である。

第4節 小括：取手アートプロジェクトの成果と課題

(1) 市民・大学・公共団体の協働による市民の創造能力支援の場の形成

小論における考察のまとめとして、「取手アートプロジェクト」における藝大、市民、公共の協働の取組みのなかでの成果、到達点と課題について検討しよう(図12参照)。「取手アートプロジェクト」の10年間の著

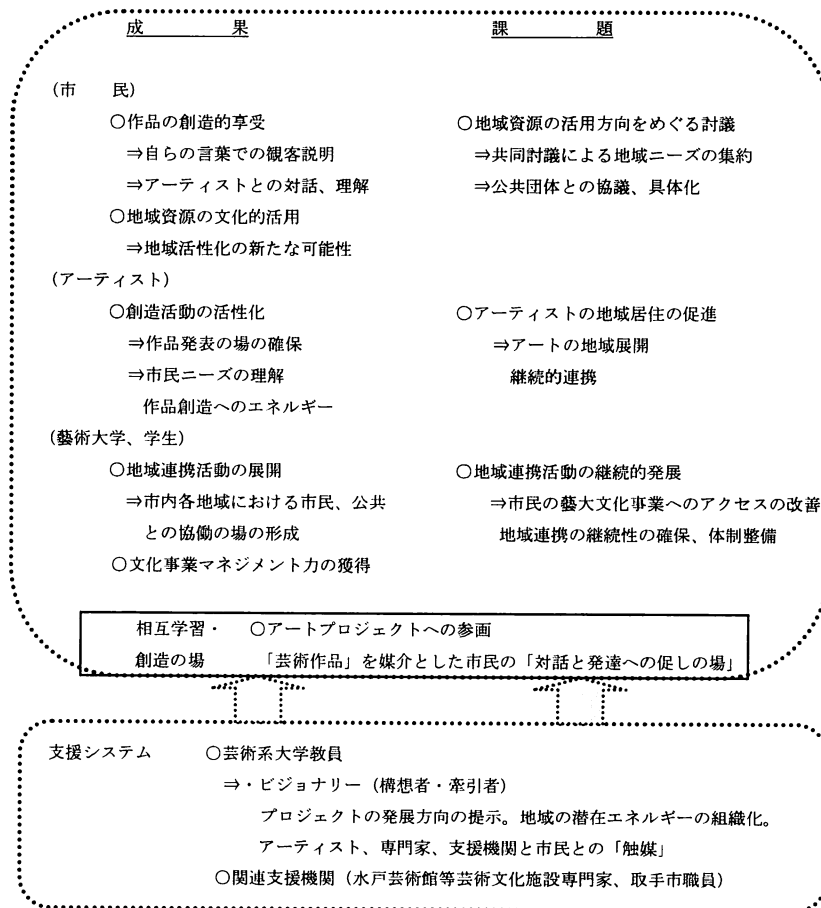


図12 「取手アートプロジェクト」における成果と課題

(出所) 筆者作成

積は、市民が、芸術系大学との連携のなかで芸術文化プロジェクトの企画、運営に自ら参画することを通じて、その文化享受能力を高め、地域文化の担い手、地域の創造的発展のイノベーターとなっていく可能性と、その支援に向けて芸術系大学の有する知と技の資産とネットワーク力が果たしうる役割の重要性を示していると考えられる。

アートプロジェクトの展開のなかで、市民は、藝大教員、学生と協働してプロジェクトの常設事務局のメンバーとして、事業企画、広報、作家との調整等に携わるとともに、会場の設営、作家の作品制作への支援等に取り組むなかで、アーティストの活動への共感をふかめ、共にイベントをつくり、市民自らのことばによる作品の享受と観客への説明に結びついていった。そこでは、市民が文化の受身の「消費者」ではなく、地域においてみずからの生活の基盤のうえに文化を創造的に享受する主体、「創造的享受者」⁽¹⁸⁾の形成に向けた主体的な取り組みが見られたと評価しうる。

この市民による文化の創造的享受のなかで生み出されたエネルギーは、戸頭地区において見られたように地域文化拠点の整備への取り組みにつながっている。地域資源の文化的活用に向けた多様な討議の場の形成が、地域振興の方向が地域に共有され、幅広い市民参画のもとで推進されるための不可欠の条件である。ハーバースはアレントの公共的活動の理念を受けて、17、8世紀における西欧市民社会形成期における制度形成をめぐる市民的討議空間としての公共圏の理念を提示したが⁽¹⁹⁾、取手のアートプロジェクトが生み出している地域形成へのエネルギーは、その文化領域における取り組みとというものであると考えられる。

それとともに、地域住民との協働の取組がアーティストの創造活動をより促進するという側面⁽²⁰⁾も重要であると考えられる。アーティストが地域と市民のニーズに接するなかで自らの芸術活動の新たなエネルギーを汲み取り、みずからの創造活動を発展させるという「芸術創造活動と市民の芸術享受の共進化 (co-evolution)」の視点が重要となってくる。

協働の取り組みのなかで、芸術大学の教員、学生が果たしてきた役割も大きい。隔年に開催される新たな公募展の企画、参加アーティストの選定、プロデュース等美術プロジェクトの方向を提案する「ビジョナリー (構想者・牽引者)」⁽²¹⁾として、また、そのネットワーク力を活かし、ヤノベケンジ氏や韓国作家、水戸芸術館など国内外のアーティスト、美術館、公共団体等他分野との連携を通じて、地域市民とグローバルな世界をつなぐネットワークの「触媒」としての役割を果たしてきた。大学教員としての継続性、芸術文化情報の集積、学生のエネルギーの相乗効果が、アートプロジェクトの10年間の継続の背景にある。

(2) 大学と地域との恒常的連携、文化拠点整備、創造的人材の地域居住促進

こうした成果のうえに、10年間の地域連携の取り組みのうえにアートプロジェクトと芸術文化を活かしたまちづくりの今後の発展のためには、いくつかの重要な課題が存在すると考えられる。

第一は、大学と地域との恒常的な連携体制の確立である。戸頭地区における住民意識調査結果からも、藝大の地域連携活動を評価しつつ、それが1回限りではなく、恒常的に継続されることが強く望まれている。藝大とその芸術文化活動がより地域に根付いていくためには今後のより継続的な地域と連携した取り組みとそれを可能にする地域連携事業専任体制の充実が必要であると考えられる。

第二には、第一の論点とも関連して、市民と藝大の連携による多様な文化活動が展開される拠点の整備である。すでに指摘されているように、藝大大学舎は市域の東端にあり、市民の円滑なアクセスという点で大きな課題を有している。取手市において計画されている取手駅前再開発による文化拠点整備⁽²²⁾は、その点で重要な意義を有するものと考えられるが、地域経済の困難な状況のもとで大きな公共投資を前提とした再開発ではなく、既存商業施設、公共施設等のリノベーションも含めたより柔軟な整備手法の検討が望まれていると思われる。またこれまでアートプロジェクトの展開においては、「リサイクリングアート」、「壁画」、「ガスタンクデザイン」等を除き公共空間への作品の恒久的な展示を前提とはしてこなかった。英国におけるパブリックアートの展開等、地域におけるアートの効果の永続性という視点にたつとき、この課題についても今後の検討が必要であると考えられる。

第三に、上記の課題の対策にもつながる重要な課題として、藝大が創出するアーティストの地域への積極的な居住促進とアートの拠点の地域展開があると思われる。各分野の創造的な人材の取手市、周辺地域への居住を促進し、その活動の場を確保していくことは、アートプロジェクトの推進体制の強化にも貢献し、地域住民のニーズの強いきめ細かな地域アートプロジェクトの継続的展開、アート活動と市民ニーズとの結びつきによる新たな需要の掘り起こし等、多面的な視点から地域の活性化に寄与するものと考えられる。

このアーティストの地域居住促進を通じた地域活性化という論点について、重要な手がかりを与えてくれるのが、アン・マークセンによる、芸術の地域振興に果たす役割についての考察である⁽²³⁾。マークセンは、アメリカの田園地域における地域振興政策として、アーティストの地域への定住促進と文化拠点整備の重要性を指摘している。そこでは、アーティストの地域居住が衰退する中心市街地と郊外部双方にとっての重要な成長の刺激となるとともに、文化センター、劇場、ライブ活動拠点、スタジオ等のきめ細かなアートセンターの整備が、交流人口の吸引、地域における文化開発の質の向上という経済的、経済外的効果の両面で大きな地域振興効果をもたらしていることを指摘している。地域における創作活動、アートイベントの開催は、地域自体の魅力増進につながるとともに、その地域経済への波及効果も、芸術文化活動が労働集約型であるという特質から、同規模の資本集約型プロジェクトへの支出と比較してより大きな地域乗数効果を有すると論じ、その視点から、公共における地域投資においても、地域資本とのマッチングによるアートスペースの整備など、大プロジェクト志向から小規模の分散型プロジェクトへの投資への重点化、コミュニティ開発との連携が求められると論じているのである。

取手においても、アートプロジェクトの地域展開に向けた取り組みとして、2007年12月には、市内の戸頭団地とならぶ大規模団地である井野団地において「井野アーティストヴィレッジ」事業が開始された⁽²⁴⁾。本事業は、藝大、取手市、都市機構の協力のもとに、団地内商業施設の空きスペースを再整備、貸し出すことで若いアーティストの制作拠点を確保し、多様なジャンルのアーティストの活動により地域住民とアートの交流を促進し、同時に地域へのアーティストの定住を促進しようとするものである⁽²⁵⁾。また、2008年には井野団地がアートプロジェクト会場となり、開催期間中には、建築家ユニット「みかんぐみ」によってカフェとしてリノベーションされた団地内施設が、プロジェクト後もアートスペース「Tappino」として再整備され、アートプロジェクト事務局が移転し、イベント、ワークショップ等に再活用されるなど地域におけるアートの拠点整備が徐々に進みつつある。

今後、取手市における住宅、都市環境整備、文化、産業政策等各分野の政策において、この創造的な人材の地域居住促進、アートの地域展開という視点を軸とした積極的取り組みが求められるところである。

小論においては、芸術系大学の役割に関して、東京藝術大学における「取手アートプロジェクト」の取り組みについて考察を行ってきた。現段階では、まだその初期の段階にあるとはいえ、市民の享受能力、創造能力の発展と地域の活性化に向けて、芸術系大学が果たしうるその潜在的な可能性には大きいものがあるといえる。地域自治体、市民との協働の取り組みのなかで、芸術系大学が、創造的な人材の供給、グローバルな視野からの知識、情報の提供を通じて市民と芸術活動との多様な出会いの場の創造を進め、市民の文化的消費能力、創造能力の発達を支援していくネットワークの核としての役割を果たしうる可能性を有しているものであり、今後、その一層の発展に向けて、大学、公共団体における幅広い条件整備を進めていくことが重要な課題となっているのである。

(謝辞)

本研究における事例調査において、東京藝術大学美術学部先端芸術表現科渡辺好明教授、東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科熊倉純子准教授、取手市戸頭団地自治会、戸頭町会役員各位、東京藝術大学社会連携推進課村松広志課長、取手市都市部中心市街地整備課都市再生係海老原雅則係長、取手アートプロジェクト実施本部事務局各位から懇切なご教示を得ました。また取手市戸頭団地自治会住民意識調査は団地自治会のご協力、熊倉准教授のご指導、ご協力のもとに行い、東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科芝山祐美氏には

役員ヒアリング記録にご助力をいただきました。各位に厚く感謝いたします。もとより本論文における事実誤認等は筆者の責任であります。あわせ査読委員から頂きました懇切なコメントに感謝いたします。

(注)

- (1) 佐々木 [1997] 参照。
- (2) 「観察から発見と判断、思考から表現という過程に働くさまざまな力が人々との対話を通して育つ」というアレナスの視点について上野 [2001]、p.49 参照。佐藤 [2003] は、個人が世界と自己の「意味」について「気づき」と「洞察」をもたらす営みとしてアートを把握し、その「出会い」と「対話」を生み出す力を重視する。
- (3) 地域イノベーション・システムについてAsheim, Gertler [2005] p.331参照。そこではバーデン・ヴュルテンベルク州における地域イノベーション・システムの最も重要な構成要素として、「強力な職業教育訓練機関」、シュタインバイス協会に代表される「技術移転機関」、地域産業のニーズを集約する「商工会議所等経済団体」、専門特化し地域ごとに形成された「生産者団体」が挙げられる。また、もう一つの代表的存在とされる「第3のイタリア」モデルについては、Piore,Sabel[1984]、Capecchi[1990]、佐々木 [1997] 参照。
- (4) Lee et al.[2000] 参照。
- (5) 本プロジェクトについてその推進の担い手である渡辺 [2007]、熊倉 [2007a] [2007b] による報告がある。小論においては、これに学びつつ、先に見た芸術系大学の地域連携における創造的人材と市民、公共の連携システムの特質の考察に焦点をあてて考察し、その成果、課題を検討したい。
- (6) 取手市「平成20年度市民アンケート結果報告書」参照。
- (7) 渡辺教授へのインタビューによる (2008年4月実施)。
- (8) 地域づくり表彰国土交通大臣賞、サントリー地域文化賞等を受け、事業への公共団体等の支援も増加している。
- (9) 利根川は、江戸初期に徳川幕府によって湖沼群をつなぎ銚子へ向けて付け替えされた新河川であり、このことによって東北地方からの水運が、房総の外洋を避けて利根川を遡り、積みかえられて内陸水運により江戸に輸送されるという新たな輸送システムが成立した。取手はその積み替えの重要拠点となった (島田 [2003] による)。
- (10) 取手アートプロジェクト実行委員会 [2004] 参照。
- (11) 「サツパ舟」プロジェクトを担当した島田氏は「厚い帆布を縫う、ロゴを染めるなど、我々の手におえない問題をかかえたとき、まさにタイミングよく専門的技能をもった方に会えて解決できた。世代も職業も生活感覚もバラバラのメンバーが『やりとげた』という満足感、共感、連帯を自覚した」と述べる (島田 [2003] 参照)。
- (12) 取手アートプロジェクト実行委員会 [2007] 参照。
- (13) 2005年の国勢調査結果によれば、取手市内就業者38%、東京都27%、千葉、埼玉等をあわせ42%が他府県での就業である。
- (14) 学習、文化、スポーツ活動への市民の参加比率は、市平均55%、戸頭地区62% (取手市「平成17年度市民アンケート調査報告書」)。近隣の公園の充実度に対する評価も高い (市平均21%、戸頭地区41%)。TAPでの会場整備、草むしりも地域の夏祭りの3日間の延長という感じがあったという (自治会、町会役員ヒアリングによる)。
- (15)「クリエイティブカフェ」(大阪創造都市市民会議、2007年2月、Graf) におけるヤノベケンジ氏講演による。
- (16) 竹内緑「終末処理場を動かした人びと—アートと地域の仕掛けあい」、取手アートプロジェクト実行委員会 [2007] 所収。
- (17) アートプロジェクトの地域への効果として地域におけるコミュニティの活性化を指摘する意見は「大地の芸術祭 妻有トリエンナーレ」においても共通する (勝村 (松本) 他 [2008] 参照)。
- (18) 東京藝術大学熊倉准教授の教示による。
- (19) Habermas [1962, 1990] 参照。
- (20) 注 (15) に同じ。
- (21) その典型としてシリコンヴァレーにおけるスタンフォード大学ターマン教授についてLee et al.[2000] 参照。
- (22) 取手市「取手“芸術の杜”創造プロジェクト」HP参照。現在、新たなまちづくり企画提案が取り組まれている。(「取手駅西口のまちづくり企画提案」HP (最終確認：2009年11月14日) 参照)。

- (23) Markusen[2006] 参照。
- (24) 都市機構 (UR) から市が賃貸し、大学がコーディネートするアトリエとして若手アーティストに貸し出し (賃料月 65,965円、各132㎡のスペースをアーティストが共同利用)。
- (25) 渡辺教授は「アーティストヴィレッジ」開設に際して、次のように述べる。「若いアーティストにとって卒業後に抱える最大の問題は、いかに作家としての活動を継続していくかであり、そのためには、制作活動の拠点 (制作場所、作品の保管場所) が必要不可欠です。私たちは、市内に彼らの制作拠点、そしてアーティスト同士が集れる魅力的な場所を確保することで、学生・卒業生の定住化を促進したいと思います。それは外からも才能と意欲をもったアーティストを呼び込むことにつながり、ひいては取手市の地域活性化方策ともなるはずです。」(平成19年11月、「井野アーティストヴィレッジ」HP)。

(参考文献)

- 明石芳彦 [2004]「アメリカのイノベーションクラスター」、松岡編著 [2004] 所収。
- Amable, B. [2003] *The Diversity of Modern Capitalism*, Oxford University Press (『五つの資本主義—グローバル化時代における社会経済システムの多様性』、山田鋭夫他訳、藤原書店、2005年)。
- Aoki, M. [2001] *Towards a Comparative Institutional Analysis*, MIT Press (『比較制度分析に向けて』、瀧澤弘和・谷口和弘訳、NTT出版、2001年)。
- Arendt, H. [1958] *The Human Condition*, University of Chicago Press (『人間の条件』、志水速雄訳、筑摩書房、1994年)。
- Asheim, B.T., Gertler, M.S. [2005] *The Geography of Innovation*, in Fagerberg et al. [2005] .
- Barro, R.J., Sala-i-Martin, X. [1995] *Economic Growth*, McGraw-Hill (『内生的経済成長論』、大住圭介訳、九州大学出版会、1997年)。
- Burt, R.S. [2001] *Structural Holes versus Network Closure as Social Capital*, in Lin et al. eds. *Social Capital Theory and Research* (『社会関係資本をもたらすのは構造的隙間かネットワーク閉鎖性か』、金光淳訳、野沢編・監訳 [2006] 所収)。
- Capecchi, V. [1990] *A history of flexible specialization and industrial districts in Emilia-Romagna*, in Pyke, F., Becattini, G. & Sengenberger, W. ed. [1990] .
- Castells, M. [1989] *Conclusion: The Reconstruction of Social Meaning in the Space of Flows*, in *The Informational City*, Blackwell Publisher (『フローの空間における社会的意味の再構築』、大澤善信訳、『都市・情報・グローバル経済』、青木書店、1999年)。
- Commission of the European Communities [2009] *Design as a driver of user-centered innovation*, Commission Staff Working Document
- ドキュメント2000プロジェクト実行委員会 [2001]『社会とアートのえんむすび1996-2000-つなぎ手たちの実践』、ドキュメント2000プロジェクト実行委員会。
- Dreze, J. Sen, A. [1989] *Hunger and Public Action*, Oxford Clarendon Press.
- 衛紀生・本杉省三編 [2000]『地域に生きる劇場』、芸団協出版部。
- 絵所秀紀 [1997]『開発の政治経済学』、日本評論社。
- 絵所秀紀・山崎幸治編 [1998]『開発と貧困—貧困の経済分析に向けて』、アジア経済研究所。
- 絵所秀紀 [2001]「後期アマルティア・センの開発思想」、法政大学経済学会『経済志林』。
- 絵所秀紀・山崎幸治編 [2004]『アマルティア・センの世界—経済学と開発研究の架橋』、見洋書房。
- Fagerberg, J., Mowery, D.C., Nelson, R.R. eds. [2005] *The Oxford Handbook of Innovation*, Oxford University Press.
- 藤野一夫 [2005]「新しい市民社会への仕掛けづくり」、後藤・福原編 [2005] 所収。
- Florida, R. [1995] *Towards the Learning Region*, *Futures*, 27 (5) .
- Florida, R. [2002] *The Rise of the Creative Class*, (『クリエイティブ資本論—新たな経済階級の台頭』、井口典夫訳、ダイヤモンド社、2008年)。
- Freeman, C. [1987] *Technology Policy and Economic Performance: Lessons from Japan*, Pinter. Publisher (『技術政策と経済パフォーマンス—日本の教訓』、大野喜久之輔監訳、新田光重訳、見洋書房、1989年)。
- 福川裕一 [2005]「持続可能な都市をめざして」、福川・矢作・岡部 [2005] 所収。
- 福川裕一・矢作弘・岡部明子 [2005]『持続可能な都市』、岩波書店。

- 後藤和子・福原義春編 [2005]『市民活動論：持続可能で創造的な社会に向けて』、有斐閣。
- Granovetter [1995/1974] *Getting a Job*, 2nd edition, University of Chicago Press (『転職—ネットワークとキャリアの研究』、渡辺深訳、ミネルヴァ書房、1998年)。
- Griliches, Z. [1995] R&D and Productivity: Economic Results and Measurement Issues, in Stoneman, P. ed [1995] .
- Hall, P., Soskice, D. eds. [2001] *Varieties of Capitalism: Institutional Foundations of Comparative Advantage*, Oxford University Press (『資本主義の多様性—比較優位の制度的基礎』、遠山弘徳他訳、ナカニシヤ出版、2007年)。
- Habermas, U. [1962, 1990] *Strukturwandel der Öffentlichkeit: Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft* (『公共性の構造転換—市民社会の一カテゴリーについての探求』、細谷貞雄・山田正行訳、未来社、1994年)。
- 花田達朗 [1996]『公共圏という名の社会空間—公共圏、メディア、市民社会』、木鐸社。
- 原田誠司 [2004]「岩手大学を中心にした産学官連携ネットワーク」、『新産業政策研究かわさき』第2号、財団法人川崎市産業振興財団新産業政策研究所。
- 原研哉 [2003]『デザインのデザイン』、岩波書店。
- 原嶋千榛 [2008]「アメリカ社会における美術館の役割の変化—アメリカ博物館協会 (AAM) における4つの報告書を中心に」、『文化経済学』第6巻第1号、文化経済学会<日本>。
- 橋本介三・小林伸生・中川幾郎 [2000]『日本産業の構造変革』、大阪大学出版会。
- 端信行・中谷武雄編 [2006]『文化によるまちづくりと文化経済』、見洋書房。
- 本田洋一 [1978]「大阪における文化振興—その現状と課題」、『自治大阪』Vol.29, No.5, 大阪府地方自治振興会。
- 本田洋一 [2005]「大都市圏文化政策の蓄積と継承—大阪府における1980年代までの文化政策の展開から」『文化経済学』第4巻第3号、文化経済学会<日本>。
- 池上惇・二宮厚美編 [2005]『人間発達と公共性の経済学』、桜井書店。
- 磯辺剛彦 [2000]『シリコンバレー創世記—地域産業と大学の共進化』、白桃書房。
- Jacobs, J. [1984] *Cities and the Wealth of Nations: principle of economic life*, Random House (『都市の経済学』、中村達也・谷口文子訳、TBSブリタニカ、1986年)。
- 陣内秀信 [2000]『イタリア小さなまちの底力』、講談社。
- Johnson, B., Edquist, C., Lundvall, B.-Å. [2003] *Economic Development and the National System of Innovation Approach, The First Globelics Conference*.
- Jones, C.I [1998] *Introduction to Economic Growth*, W.W.Norton (『経済成長理論入門』、香西泰監訳、日本経済新聞社、1999年)
- 片山泰輔 [2006]『アメリカの芸術文化政策』、日本経済評論社。
- 勝村(松本)文子・田中鮎夢・吉川郷主・西前出・水野啓・小林槇太郎 [2008]「住民によるアートプロジェクトの評価とその社会的要因—大地の芸術祭 妻有トリエンナーレを事例として」、『文化経済学』第6巻第1号、文化経済学会<日本>。
- 川勝英子・根木昭 [2002]「学校教育と芸術活動の連携の意義と課題—アートマネジメントの新たな展開としての社会サービス」、『長岡技術科学大学研究報告』第24号。
- 熊倉純子 [2001]「『アートの家』がまちに生まれる可能性—拠点づくりと組織運営」、ドキュメント2000プロジェクト実行委員会 [2001] 所収。
- 熊倉純子 [2007a]「大学と地域連携—東京藝術大学と市民・行政のパートナーシップ事業『取手アートプロジェクト』」『文化経済学』第5巻第4号、文化経済学会<日本>。
- 熊倉純子 [2007b]「アートマネジメントにおける市民運営と専門性—取手アートプロジェクトの試みから」『アートマネジメント研究』第8号、日本アートマネジメント学会。
- 黒崎卓 [2004]「貧困・不平等研究におけるセンの貢献」、絵所秀紀・山崎幸治編 [2004] 所収。
- 紺野登 [2004]『創造経営の戦略—知識イノベーションとデザイン』、筑摩書房。
- Lee, C.M, Miller, W.F., Hancock, M.G., Rowen, H. [2000] *The Silicon Valley Edge: A Habitat for Innovation and Entrepreneurship*, Stanford University Press (『シリコンバレー なぜ変わり続けるのか』、中川勝弘監訳、日本経済新聞社、2001年)。

- Lin, N., Cook, K., Burt, R eds. [2001] *Social Capital Theory and Research*, Aldine de Gruyter.
- Lundvall, B-Å., Johnson, B., Andersen, E.S., Dalum, B. [2002] National systems of production, innovation and competence building, *Research Policy*, Vol.31.
- Markusen, A. [2006] An Arts-Based State Rural Development Policy, *Journal of Regional Analysis and Policy*. Vol. 36, No. 2.
- 前田昇 [2002] 『スピノフ革命』、東洋経済新報社。
- 宮本憲一 [1980] 『都市経済論—共同生活条件の政治経済学』、筑摩書房。
- 宮田由紀夫 [2009] 『アメリカにおける大学の地域貢献—産学連携の事例研究』、中央経済社。
- 森岡清志編 [2008] 『地域の社会学』、有斐閣。
- 宗田好史 [2000] 『にぎわいを呼ぶイタリアのまちづくり—歴史的景観の再生と商業政策』、学芸出版社。
- 成瀬龍夫・二宮厚美 [2005] 「現代の国民生活とナショナル・ミニマムの意義」、池上・二宮編 [2005] 所収。
- Nelson, R., Winter, S. [1982] *An Evolutionary Theory of Economic Change*, Harvard University Press (『経済変動の進化理論』、後藤 晃・角南篤・田中辰雄訳、慶應義塾大学出版会、2007年)。
- Nelson, R. ed. [1993] *National Innovation Systems A Comparative Analysis*, Oxford University Press.
- 西川潤 [2007] 「連帯経済—概念と政策」、西川他編 [2007] 所収。
- 西川潤、生活経済政策研究所編 [2007] 『連帯経済—グローバル化への対案』、明石書店。
- 野田邦弘 [2008] 『創造都市横浜の戦略—クリエイティブシティへの挑戦』、学芸出版社。
- 野上裕生 [2007] 『人間開発の政治経済学』、アジア経済研究所。
- 野沢慎司編・監訳 [2006] 『リーディングス ネットワーク論—家族・コミュニティ・社会関係資本』、勁草書房。
- 太下義之 [2009] 「『英国のクリエイティブ産業』政策に関する研究—政策におけるクリエイティビティとデザイン」、『季刊政策・経営研究』Vol.3、三菱UFJリサーチ&コンサルティング。
- Piore, M.J. Sabel, C.F. [1984] *The Second Industrial Divide: Possibilities for Prosperity*, Basic Books (『第二の産業分水嶺』、山之内靖・永易浩一・石田あつみ訳、筑摩書房、1993年)。
- Pyke, F., Becattini, G. & Sengenberger, W. ed. [1990] *Industrial Districts and Inter-Firm Co-operation in Italy*, International Institute for Labour Studies, Geneva.
- 佐々木雅幸 [1997] 『創造都市の経済学』、勁草書房。
- 佐々木雅幸 [2001] 『創造都市への挑戦—産業と文化の息づく街へ』、岩波書店。
- 佐々木雅幸 [2009] 「文化多様性と社会包摂へ向かう創造都市」、佐々木・水内編 [2009] 所収。
- 佐々木雅幸・水内俊雄編 [2009] 『創造都市と社会包摂—文化多様性・市民知・まちづくり』、水曜社。
- 佐藤学、今井康雄編 [2003] 『子どもたちの想像力を育む—アート教育の思想と実践』、東京大学出版会。
- 佐藤学 [2003] 「はじめに一芸の技法を生きた技法に」、想像力と創造性の教育へ—アートと子どもの結合の諸相、佐藤・今井編 [2003] 所収。
- Sen, A. [1981] *Poverty and Famines: An Essay on Entitlement and Deprivation*, International Labour Organization, (『貧困と飢饉』、黒崎卓・山崎幸治訳、岩波書店、2000年)。
- Sen, A. [1985] *Commodities and Capabilities*, Elsevier Science Publishers B.V. (『福祉の経済学—財と潜在能力』、鈴木興太郎訳、岩波書店、1988年)。
- Sen, Amartya [1992] *Inequality Reexamined*, Oxford University Press (『不平等の再検討—潜在能力と自由』、池本幸生・野上裕生・佐藤仁訳、岩波書店、1999年)。
- Sen, A. [1997] Human Capital and Human Capability, *World Development*, Vol.25, No.12.
- Sen, A. [1999] *Development as Freedom*, Alfred A Knopf, Inc. (『自由と経済開発』、石塚雅彦訳、日本経済新聞社、2000年)。
- 島田忠幸 [2003] 「舟プロジェクト」、取手アートプロジェクト実行委員会 [2003] 所収。
- 清水健司 [1996] 「取手ネットワークシステム (INS) の活動について」、『産業立地』、1996年7月。
- 下平尾勲・伊東維年・柳井雅也 [2009] 『地産地消—豊かで活力ある地域経済への道標』、日本評論社。
- Smith, K. [2005] Measuring Innovation, in Fagerberg et al. [2005] .

- 杉浦竜夫 [2004] 「アマルティア・センの経済学的方法論と環境問題への適用可能性」、北海道大学『経済学研究』第53巻第4号。
- 鈴木興太郎 [1998] 「機能・福祉・潜在能力—センの規範的経済学の基礎概念」、一橋大学経済研究所『経済研究』Vol. 49, No.3。
- 寺島俊穂 [2006] 『ハンナ・アレントの政治理論—人間的な政治を求めて』、ミネルヴァ書房。
- Throsby, D. [2001] *Economics and Culture*, Cambridge University Press (『文化経済学入門』中谷武雄・後藤和子監訳、日本経済新聞社、2002年)。
- 取手アートプロジェクト実行委員会 [2003] 『取手アートプロジェクト2002—Take me to the River川を知る川に学ぶ』、取手アートプロジェクト実行委員会。
- 取手アートプロジェクト実行委員会 [2004] 『取手アートプロジェクト2003—オープンスタジオin取手 アーティストの仕事場』、取手アートプロジェクト実行委員会。
- 取手アートプロジェクト実行委員会 [2005] 『取手アートプロジェクト2004—1/2のゆるやかさ』、取手アートプロジェクト実行委員会。
- 取手アートプロジェクト実行委員会 [2007] 『取手アートプロジェクト2006—一人前のいたずら—仕掛けられた取手』、取手アートプロジェクト実行委員会。
- 上野行一監修 [2001] 『まなざしの共有—アメリア・アレナスの鑑賞教育に学ぶ』、淡交社。
- 上山信一・稲葉郁子 [2003] 『ミュージアムが都市を再生する—経営と評価の実践』、日本経済新聞社。
- Utterback, J.M., Vedin, B.A., Alvarez, E., Ekman, S., Sanderson, S.W., Tether, B., Verganti, R. [2006] *Design-Inspired Innovation*, World Scientific Publishing (『デザイン・インスパイアード・イノベーション』、サイコム・インターナショナル監訳、ファーストプレス)。
- 渡辺好明 [2007] 「取手アートプロジェクト (TAP) —アートで引き出す・アートを支える『地元力』」、『観光文化』第181号、(財)日本交通公社。
- 矢作弘 [2005] 「都市を養育することの意味」、福川・矢作・岡部編 [2005] 所収。
- 矢作弘 [2009] 「都市の創造的縮小の時代—人口減少、環境容量枯渇時代の『都市の“かたち”』」、佐々木・水内編 [2009] 所収。
- 柳ヶ瀬孝三 [2005] 「人間発達を支援する社会システムの経済思想」、池上・二宮編 [2005] 所収。
- 山田鋭夫 [2008] 『さまざまな資本主義—比較資本主義分析』、藤原書店。
- 山本眞一 [2006] 「大学の社会的責任」、日本計画行政学会『計画行政』、Vol.29, No.2。
- 吉本光宏 [2001] 「アートと市民・子どもをつなぐ『アウトリーチ活動』—芸術による社会サービスの可能性」、『ニッセイ基礎研REPORT』(2001年10月)、ニッセイ基礎研究所。